

カリブ文学からみるポストコロニアリズムと エコクリティシズム

Postcolonialism and Ecocriticism in Caribbean Literature

齊 藤 みどり

SAITO Midori

要旨

ポストコロニアリズムとエコクリティシズムという文学批評の分野は、これまで別々に発達してきたものだが、近年では互いの視点を取り入れた研究が目指されている。その中でもカリブ文学は、ポストコロニアリズムとエコクリティシズムを結びつけて分析するのに最適な分野と言われている。というのも、帝国主義と環境問題は、共に最も貧しいものを搾取しているという点で共通しているからであり、カリブ地域の文学は両者の影響を強く受けているからである。本稿では、ポストコロニアリズムとエコクリティシズムについて概説し、カリブ出身の思想家や作家が自然をどう捉えているのかについてまとめ、ハイチにおける文学作品がどのように人間と環境の搾取に対峙してきたかについて考察した。

はじめに

文学作品を語るときに、様々な批評理論の枠組みを借りつつ語るということはもはや珍しいことではない。もちろん、作品を理解する上でその精読が重要であることは変わらないのだが、文学批評という枠組みは、ある作品をそれまでは考えられもしなかった作品と比較させて一つの作品を論じ、地域や時代背景の違う作品が互いに共有している問題意識を浮かび上がらせてくれる。その意味では、文学の批評理論というものは単なる抽象的なコトバの羅列ではなく、国家や言語、宗教などといった制度で分断されているさまざまなコトバたちを、ゆるやかに結びつけてくれる一つの思考の方法なのかもしれない。しかしその一方で、それぞれの理論の目的と方向性が異なっているため、互いに反目する理論の陣営もあらわれた。その代表的なものが、ポストコロニアリズムと呼ばれる理論の枠組みと、エコクリティシズムと呼ばれる理論の枠組みである。本稿ではポストコロニアリズムとエコクリティシズムという、文学批評では異なったものとして考えられている理論の結節点を、カリブ文学、特にハイチの文学を通して考察したい。

ポストコロニアリズムとエコクリティシズム

ポストコロニアルという言葉は、直訳すれば植民地主義以後、という意味で、植民地で生まれた文芸作品を分析するのに使用される言葉だが、この定義はポストコロニアリズムを考えるには十分ではない。というのも、現在の世界の貧困や紛争の多くはかつての植民地政策に起因しており、植民主義の支配と排除の構造は形を変えて現在でも生き続けているからである。だから、ポストコロニアルとは今もなお持続する植民地主義を問題として捉えることであり、ポストコロニアリズムという言葉は、文芸作品の中に形をかえながらも、根強く存続し続ける植民主義の存在を明るみにする、一連の批評活動と考えられるだろう。

他方で、エコクリティシズムとは、自然の純粹性の回復を訴えつつ、人間による環境汚染について批判的に捉えている文学作品を分析の対象としていることが多い。エコクリティシズムという言葉自体は1978年にW・リュカートによって初めて使われたもので、文学作品の研究が環境問題に積極的に関わっていくという姿勢を示した言葉である。

エコクリティシズムとポストコロニアリズムという二つの批評の分野には、伝統的にある種の対立が見られてきた。というのもポストコロニアル批評家は、しばしば人間不在の批評としてエコクリティシズムを捉え、エコクリティシズムの批評家は、ポストコロニアリズムは環境破壊に無関心であると批判してきたからだ。アメリカのポストコロニアル研究者であるロブ・ニクソンによると、ポストコロニアル批評はハイブリディティを探求する一方でエコクリティシズムは純粹性を求め、ポストコロニアル批評は移動に焦点を当てる一方でエコクリティシズムは場所に焦点を当てていると論じている。さらにポストコロニアリズムはコスモポリタニズムを目指すのに対して、エコクリティシズムはナショナリズムに向かい、ポストコロニアリズムは歴史を回復させようとするがエコクリティシズムは歴史を越えようとしている、と指摘している (Rob Nixon 2005, 235)。

このように、ポストコロニアルの批評家たちとエコクリティシズムの批評家たちは、別の方向を向いたまま活動してきたのだが、近年になってようやく二つの分野の橋渡しが試みられている。例えば、近年の国際環境文学学会の学会誌ではポストコロニアルがテーマとなり、編集後記で、アーシュラ・ハイセは一つの批評の方向性だけでなく、他の分野の批評や考え方を学んで行く必要があると唱えている。さらに、前述のニクソンも奴隷制や帝国主義は短期間での搾取であるのに対して、環境問題は社会的弱者をゆっくりと長期的に搾取しており、その意味では環境問題はあたらしい帝国主義だと考えている。さらにニクソンは、プランテーション経済や奴隷貿易の暴力性などから、カリブの島々こそがポストコロニアリズムとエコクリティシズムという二つの分野にとって重要な場所になるはずだと主張している。なぜならそこでは、他の地域にはみられない規模で人間と環境の搾取が行われてきたからである (Rob Nixon 2005, 235)。

カリブの特異性：エデンとしてのカリブ

どうしてカリブの島々について考えることが、人間と環境の搾取について同時に考えることになるのだろうか。ヨーロッパや北米の観光客を魅了しているカリブの島々の自然は、実はそのほとんどが人工的に造られたものであり、植物だけでなくそこに住む人々も他の場所から連れてこられたものである。この人工的に造られたカリブの自然は、帝国主義が環境に与えたインパクトの強さを物語っている。

西洋では、中世以降もエデンの園がまだあるものとして考えられており、特にカソリックやプロテスタントは神によって創造された楽園が地球のどこかには必ずだと確信していた。こうして大航海時代の冒険家たちは失われたエデンを探しに海に旅に出るのだが、誰ひとりとしてエデンを見つけることができなかつた。しかし、エデンを見つける事ができなかつた植民者たちは、代わりにカリブ海の島々をエデンの庭として開拓することに決めたのである (Prest 9)。

アフリカからの奴隷だけではなく、キリスト教をカリブの島々に持ち込んだ植民者たちは、世界の様々な場所から人や植物を集めることでエデンを再创出しようとした。この楽園の創出はもちろん血なまぐさいものであり、その楽園を維持するためには奴隷達の尊い犠牲が必要だったことを忘れてはならない。結果として、植民者たちは、植物を持ち込んでもともとあった風景を変えてしまっただけでなく、自然への概念すら変えてしまった。

また、カリブの植民地は新しいエデンの園になっただけでなく、混血によってより優秀な人種をつくりだす植民者たちの実験場にもなった。容易に形を変える事ができて、人の意のままになる自然というイメージは、カリブの女性達にもあてはめられた。先住民、黒人奴隷女性への性的な欲望がアメリカ大陸の植民の原動力になっていたことを、ロバート・ヤングも『植民地主義の欲望』 (*Colonial Desire*) (105) で示唆している。混血への欲望は、非西洋の女性をより性的に表象することにつながり、旅行記だけでなく、ピエール・ロティなどの流行小説家が植民地の女性を従順なものとして描き出し、植民者の男性性とその権力を強固なものにしていった。フランス語圏でそのなかでも著名なのが、ドゥドゥイズムと呼ばれる一連の作品群である。ドゥドゥという女性像は、いつも微笑んで、男性に簡単に身を任せる現地の女性を指しており、アンティューユなどのフランス領のカリブの島を女性化することに使用された。植民地を魅惑的な女性になぞらえて描き出したのは、フランスだけではなく他の植民地についても共通したものであったが、ここで重要なのは、カリブの自然も、大半が男性である植民者の意のままになる女性として表象されていたことであろう (Hyam 92)。

エデンの神話とキンケイド、グリッサン、ナイポール

ジャマイカ・キンケイドというアンティグア出身の小説家は、その著作『私の庭』 (*My Garden*) で、アンティグアに茂っている樹木は、もともと植民者によって世界各地から持ち込まれていたことを記している。例えば、ブーゲンビリアは南米大陸から持ち込まれ、

ルリマツリは南アフリカ、綿花はマレーシア、ハイビスカスはアジアから、アラマンダはブラジルから、ポインセチアはメキシコから、楽園鳥草は南アフリカから、テッポウユリは日本から、火炎樹はマダガスカルから、モクマオウはオーストラリアから、南洋杉はノーフォークから、タマリンドはアジアから持ち込まれたものである (Kincaid 100)。このように、アンティグアの植物はほとんどが外国からもたらされたものであり、キンケイドはアンティグアに自生する植物の名前を知らないことに気がつく。これは、一つの島の植物相が植民地主義によってすっかり変えられたことの証であり、あらゆる植物をカリブに集めそこにエデンの園を再現しようとした植民者たちの遺産でもある。また、このことは、カリブの「自然」というものはいわゆる手を加えられてはいない純粋なものではなく、実は人の手によって作り込まれたということを示唆もしている。言い換えると、西洋文明の基盤にある自然と文明という二項対立の普遍性が、キンケイドによって問い直されている。

マルティニークというカリブの小さな島の出身の思想家であるエドゥアール・グリッサンも、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリのリゾームという概念を援用しつつ、カリブの文化は根茎（リゾーム）で、様々なものと複雑に交差しながら発達した文化であるのに対して、ヨーロッパ文化は、他のものを排除し、殺略の上に成り立った「根」の文化だと考えている。彼はリゾームについてこう語っている。：

ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは根という概念を批判し、おそらく根付くという概念も批判している。根は唯一のものであり、その根は株をはって周囲のものを殺してしまう。彼らは、根という概念の代わりに、リゾームという概念を提案する。それは複雑に絡まりあった根茎のシステムで、地面か空中に広がるネットワークであり、そこには他のものの場所を奪うような根はないのである。このリゾームという概念は根無しというアイデアを保持しているだけでなく、全体主義的な根という考えに挑んでいるのだ。リゾーム的な思考というものは私が呼ぶところの「関係の詩学」の裏にある条理であり、そこでは「他なるもの」との関係のもとに全てのアイデンティティが広がって行くのである。

Gilles Deleuze and Felix Guattari criticized notions of the root and even perhaps, notions of being rooted. The root is unique, a stock taking all upon itself and killing all around it. In opposition to this they propose the rizhome, and enmeshed root system, a network spreading either in the ground or in the air, with no predatory rootstock taking over permanently. The notion of the rhizome maintains, therefore, the idea of rootedness but challenge that of a totalitarian root. Rhizomatic thought is the principal behind what I call the Poetics of relation, in which each and every identity is extended through a relationship with the Other. (Glissant 11)

グリッサンはこのリゾームという概念が、本来そこに住んでいた先住民たちが抹殺され、代わりに植物と奴隷たちが他の場所から運ばれたカリブ文化の根底にあるものと考えている。グリッサンはヨーロッパ文化を継承によるもので、カリブの文化は「リゾームの文化」であり、根が無いということは否定的な意味よりも、クレオール化、ハイブリディ

ティ、というカリブ文化を象徴する現象と繋がっていると論じる。

さらに、グリッサンは環境についてカリブの観点から再解釈している。彼にとってヨーロッパのエコロジーという概念は地球の神秘化と排他主義と密接に繋がっているが、カリブのエコロジーは相対的で、人間による土地の所有が否定されているという (Glissant 146)。

グリッサンは、自然と文明などといった二項対立的に基づく西洋的なエコロジー概念とは距離を置きつつ、カリブにおけるエコロジーはヨーロッパのものの複製ではないと主張している。と言うのも、植民地主義では、ビル・アシュクロフトが指摘するように、白人/黒人、善/悪、美しい/醜い、などといった様々な二項対立が巧妙に絡まりあい、「植民者、白人、人間」という集合概念が「被植民者、黒人、獣のようなもの」という集合概念に対するものとして形成されてきたからだ (Ashcroft, Griffiths, and Tiffin 24)。結果的に、このように構造的に関連性のある二項対立が、「文明化されておらず、原始的な人々」を「啓蒙する」のが「白人の責務」だという信念を広めてしまったのである (Ashcroft 26)。言い換えれば、自然と文明といった二項対立的な概念が植民地主義の根底にあるからこそ、カリブ出身の思想家や作家たちは、とりわけ西欧文化が自明としている様々な概念を問い直そうとしているのだ。

キンケイドやグリッサンの他に、トリニダード出身のノーベル賞作家である V.S. ナイポールも、ヨーロッパの「自然」という概念や「田舎」という概念の自明性に疑問を投げかけているのを、前述のニクソンは「ポストコロニアル・パストラル」という言葉を使って表している。ナイポールは半自伝的作品である『到着の謎』 (*Enigma of Arrival*) で、牧歌的な英国のウィルトシャーの田園風景を前に、彼が住んでいる邸宅と彼の祖先が住んでいたトリニダードの粗末な小屋を対比させて、彼を作り出した植民の歴史に思いを馳せている。ナイポールは植民地トリニダードの思い出と牧歌的でイノセントな英国の田園風景を重ね合わせることで、読者に違った角度から田園を捉えなおすように呼びかけているのだ。このようなナイポールのテキストの特徴を、ニクソンは「ポストコロニアル・パストラル」とよび、次のように説明している。:

イギリスの田園風景といったアイディアの中心には、労働や暴力が介入しない理想の庭という考えがある。それだけで成立しているようなナショナル・ヘリテージになるために、イギリスの田園風景は植民地の空間や植民地主義の歴史をそこから押しやることで成立しているのだ。しかし植民地空間の記憶がイギリスのパストラルリズムに乱入したらどうなるのだろうか？ 国家そのものの定義と自律性に疑問を投げかけたら？ 結果としてあるのは私がいうところのポストコロニアル・パストラルである。ポストコロニアル・パストラルとは、植民地の環境と文化の荒廃の記憶を理想化された自然に投影するものである。ポストコロニアル・パストラルとは、ある種の環境の二重意識 (ダブル・コンシャスネス) である。

At the heart of English pastoral lies the idea of the nation as garden idyll, where neither labor nor violence intrudes. To stand as a self-contained national heritage landscape, English pastoral has depended on the screening out of colonial spaces and histories But what happens when memories of colonial space intrude upon

pastoralism, disturbing its pretensions to national self- definition and self- containment? The result is a kind of writing that I have called postcolonial pastoral. Writing that refracts an idealized nature through memories of environmental and cultural degradation in the colonies. Postcolonial pastoral can be loosely viewed as a kind of environmental double consciousness. (Nixon 245-246)

ニクソンによると、ナイポールの作品はイギリスの静かで豊かな田園風景の陰に、大西洋奴隷貿易の忌まわしい記憶があることを静かに訴えている。植民地からきたもののみならず自然や田園風景は、植民地出身のものでなければわからない (246)。美しい自然というのは他の土地の人々の搾取によって成立している、というのはカリブ出身の作家たちの多くが共通して持つ認識でもある。

上述のカリブの作家たちの考察は、西欧のエコクリティシズムは決められた地域のみに関心を寄せ (bioregional) て、それが普遍であるかのように考えている (transcendentalist) というニクソンらの指摘をすでに先取りしているかのようなのである。というのも、それぞれがカリブでの「自然」の自明性を問い直し、西欧とは違う自然観を提起しているからである。こうした特異な自然観に至る重要な背景として、カリブのプランテーション文化が考えられる。シルヴィア・ウィンターはプランテーション文化の特徴を「小説と歴史、プロットとプランテーション」(“Novel and History, Plot and Plantation”) で次のように述べている。

カリブの地域は古典的なプランテーション地域である。というのもその多くのユニットは、社会を作るためでなく、市場に単一作物を生産するためのプランテーションを稼働させるために、人々とともに作られたのだ。これは、カリブの社会というものとは市場システムに付属するかたちで成立し、同じくその人々も、彼らが生産した単一作物であるサトウキビに付属するかたちで存在したことを意味している。

The Caribbean area is the classic plantation area since many of its units were planted with people, not in order to form societies, but to carry on plantations whose aim was to produce single crops for the market. That is to say, the plantation societies of the Caribbean came into being as adjuncts to the market system; their peoples came into being as an adjunct to the product, to the single crop commodity – the sugar cane – which they produced. (Wynter 95)

プランテーションはあくまでも商業目的のための農園であり、そこで働く人々は道具以外のなにものでもなかった。ウィンターは、プランテーションシステムにおいて「一方の自然の変化が始まり」、それと同時に「人間性の抹殺 (dehumanization) と疎外」が始まったとしている。そこでは、自然に発生した共同体にあるような人々の結びつきは初めから否定されており、いかに農園から利益を生み出すかだけが農園主の関心事であった。ウィンターによると、プランテーションのシステムに対抗したのが、奴隷が所有した個人農園 (プロット) の文化であると考えているが、このプロットを、奴隷たちや奴隷たちの子孫の間で生まれたプロット (物語) として解釈したらどうだろうか。プロットを文学作品に

おける物語と再定義して、文学は人間と環境の搾取による荒廃にどのように抵抗したのか、その一例を、ハイチの文学作品を中心に考察したい。

ハイチという場所

ハイチはフランス領から独立前は、世界でも有数の砂糖産出地としての栄華を誇っていた地域であった。また奴隷制廃止を謳った憲法を成立させた最初の国として1804年に独立した国である。だが革命以前には豊かであったにもかかわらず、ハイチは今では世界の最貧国になってしまった。そうなった理由として考えられるのは、奴隷制ののちに続いた環境と人々の搾取が挙げられるだろう。ハイチも他のカリブの島々のようにプランテーション経済で成立していたが、独立後は農園主の土地は元奴隷たちに分割され、元奴隷たちの多くは小作人となった。だがそのことがハイチの貧困を直接的に引き起こしたわけではない。革命後のハイチでは、ごく少数のムラトと革命軍の高官が、農業からの収入を補うために貿易に着手し、国の税関や税金を意のままに操ろうとした。対照的に、農民たちは生活に必要な作物を小さな畑に栽培して細々と生計を立てることになった。こうして、権力を握る一部の富裕層とそれ以外の大多数の黒人の農民層の格差と不平等は広がっていったのである (Arthur 150)。19世紀の後半には、ハイチの木材が輸出され、国内の森林が無計画に伐採されるとともに、水源も次第に消滅していく。そこに追い打ちをかけたのがアメリカのハイチ占領 (1915-34) である。占領軍はそれまで施行されていた外国人土地所有禁止法を廃止し、約250,000エーカーという広大な土地をアメリカの企業に貸し出した。さらに占領軍はハイチの農民に強制労働を課して、道路や橋を建設させ、それまでは近寄ることも困難だった土地を開発して企業に貸し出していった (Arthur 151)。

耕す場所を追われ、貧困へと追い詰められていくハイチの人々の様子は、1944年に出版されたジャック・ルーマンの『朝露の統治者たち』 (*Gouverneurs de la Rosée*) に描かれている。主人公のマヌエルはキューバで15年間働いたあと故郷に戻るのだが、村の荒廃したさまと人々の困窮ぶりに言葉を失う。彼が故郷で見たものは、村人が対立し、いがみ合い、殺しあい、木も草原も無くしてしまった殺伐とした光景だった。人々はその日の食事ですら満足に得ることができず、骨と皮になっていた。マヌエルは木が切り倒されていく丘をみて、こう嘆く：「全ての木を切り倒してしまったのだね。土はむき出して保護されていない。木がないと、土は保てない。マンゴや檳や黒檀の木こそが土が乾いたときに水を与え、強い日差しから土を守ってくれるのに」 (Roumain 45)。マヌエルの言葉が、彼がハイチから離れていたほんの数年のうちに、島の様子が様変わりしてしまったことを伝えている。マヌエルは、消えた水源を再び見つけて耕作ができるようにすることこそが、村人を和解させる方法だと思いつき、ついに水源を見つけるのだが、それを妬んだ村人に殺されてしまう。しかし、彼の遺志を継いだ恋人が村人たちを再び結びつけ、水路を作ろうと計画する。

この小説は、独立後のハイチの荒廃を環境の破壊と結びつけて、独裁者の一方的な支配に対抗する労働者の団結を呼びかけるものだが、残念なことに現実のハイチではマヌエルのような英雄は現れなかった。アメリカの占領後のデュバリエ親子の独裁政権は、反乱分

子を警戒して、ゲリラの隠れ場所になりそうな森の木々を大幅に伐採してしまう。こうして、現在の荒れ果てたハイチの原型が出来上がったのである (Arthur 151)。

デュバリエの独裁政権下で小説を発表し、独裁政権とアメリカの占領によって荒廃していくハイチを描いた作家に、マリー・ヴュー・ショーフがいる。彼女はデュバリエに批判的であり、その作家活動も政府によって監視されていた。例えば政権を痛烈に批判した彼女の『愛、怒り、狂気』 (*Amour, Colère, Folie*) という3編の短編小説からなる小説はパリに送られて、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの援助の下に1968年に出版されるが、ハイチで販売された書籍は、デュバリエの秘密警察を恐れて、彼女の夫と娘が買い占める必要があった。その *Amour, Colère, Folie* では、ドゥバリエ政権下の秘密警察による森林の伐採とハイチの人々の窮状が結びつけられている。特に「怒り」 (*Colère*) では、政府に追い詰められ、困窮するムラートの家族が描かれているが、彼らの家庭の象徴である庭にあるレモンの木が勝手に「黒いシャツを着た男たち」によって伐採され、そこから家族の崩壊が始まる。父親は、自分の家族の土地が政府によって没収されるのを防ぐために、長女のローズが役人に性的に搾取されることを許してしまう (Vieux-Chauvet 244)。またローズも、自分たちの家族を救うために役人に身をまかせるのだが、彼女は自分たちの家族が無意識に犯した罪の償いのためと思って自分の境遇を諦めてしまう。というのも、彼女は裕福なムラートの家族の娘であり、家族の所有する土地が殺人によって得られたものだと考えていたからだ。櫛の木の下で眠っていた時、彼女は血のついたシャツを着た男が、彼から土地を奪った男の子孫に復讐を誓う夢を見るのだが、そこから「自分たちの不幸は自分たちの祖先が蒔いたものである」ことに気がつく (ibid 250)。権力による自然の搾取がやがて女性の搾取とつながり、そして家庭の崩壊を引き起こす負の連鎖を描いたこの作品は、デュバリエ政権とアメリカによるハイチ占領の痛烈な批判だけでなく、土地を占有すること、言い換えれば植民地主義が招く悲劇の反復を描いている。

独裁政権下の人々への搾取が環境の荒廃につながる、または自然の災害は人災であるという観点から書かれているのが、2010年のハイチの大地震後に書かれた文学作品である。ここでは、ポストコロニアリズムとエコクリティシズムのつながりを考察するためにも、地震直後に書かれたロドニー・サン・エルロアの「青い丘」 (“The Blue Hill”) と、もう一つはエドウィッジ・ダンティカの『地震前の私たち、地震後の私たち、それぞれの記憶よ、語れ』 (*Create Dangerously*) を取り上げたい。

エルロアの “The Blue Hill” にある「青い丘」とは、「仲の良い隣国」によって廃棄された工業廃棄物の山の名称である。軍や政府の役人たちは工業廃棄物をハイチに受け入れることで隣国から多大なお金を懐に入れるのだが、それがどのような廃棄物なのかは住民には知らされていない。時間がたつにつれ、人々の体は青い発疹に覆われていくが、その事実は国家の安全のために秘密にさせられる (Eloi 275)。この物語が想起させるのは、1998年に、フィラデルフィアからの貨物船が、ハイチ北部の町の近くに4000トンもの有害廃棄物を肥料だと偽って違法に廃棄した事件である。

主人公のシミドールだけが軍や政府の企みに気がつき、人々に声を上げるように呼びかけようとする (Eloi 276)。だが時は既に遅く、彼が声を上げようとした時には世界の終わりがきて、彼はうねる地面に飲み込まれてしまう。この短編小説での「世界の終わり」とは、実はハイチの大地震を示しているのだが、この最後の場面は、環境汚染とハイチの

大地震との関連を示唆し、自然災害とみえるハイチの地震は、実は人災であったというメッセージにも読み取れる。

同じようにダンティカの『地震前の私たち、地震後の私たち、それぞれの記憶よ、語れ』も、エルロアの作品と同じく、ハイチの地震とそれ以前のデュバリエ親子の独裁政権を結びつけている。このエッセイの後半部分は主に地震後のハイチの人々の様子を描写したもののだが、冒頭部分はデュバリエ政権を打倒しようとした13人の「若きハイチ人」の一員であったマルセル・ヌマとルイス・ドロウインの処刑場面から始まる。この処刑は彼女が誕生する前の出来事だが、彼女の両親のアメリカへの移住を決定付け、ダンティカを愛するハイチから遠ざける原因となった。さらにエッセイは、独裁政権の下、かろうじて生き延びた知人についての記録に続く。そして、地震によって家や家族を失い、悲嘆にくれる人々の中で、ダンティカはどのようにして人々の家は簡単に崩れたのに、教会だけ崩れなかったのだろうと自問する。ハイチの地震についてのエッセイがデュバリエ政権による処刑の場面で始まり、そして独裁政権の生き残りの人々の証言へと続いていることは、ダンティカも、大地震が引き起こした様々な悲劇の根源を、それ以前の植民地主義と独裁制に見出しているのかもしれない。

おわりに

カリブの作家たちの自然観やハイチの小説は、ポストコロニアルとエコクリティシズムの批評家たちが近年になって試みている試みを、何年も前から取り組んでいることを示している。それは自然と人間への搾取の間に関連を見出し、問いかけることである。このような視座は、カリブの社会がプランテーションシステムという初期の資本主義的経済システムの下に成立したからこそ得られたものかもしれない。カリブ文学を環境批評の観点から読み直すことは、植民地主義と、人種的「他者」の征服、自然の征服というものが全て繋がっていることに気付かせてくれる。そして、社会的な正義を目指すことは、環境的な正義を目指すことと同じ意味を持つことを、我々に教えてくれるのである。

* 本研究は JPS 科研費 JP17K02561 の助成を受けたものです。

参考文献

- Arthur, Charles. "Confronting Haiti's Environmental Crisis," Ed. Helen Collinson, *Green Guerrillas*. Russell Press, 1996, 149-157, Print.
- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths and Helen Tiffin Ed. *Post-Colonial Studies: The Key Concepts*. Routledge: London, 2002. Print.
- Danticat, Edwidge. Ed. *Haiti Noir*. New York: Akashic Books, 2010. Print.
- . *Create Dangerously*. New York: Vintage, 2011. Print.
- Glissant, Edouard. *Poetics of Relation*. Michigan: U of Michigan P, 2003. Print.

- Hyam, Ronald. *Empire and Sexuality*. Manchester: Manchester University Press, 1990. Print.
- Kincaid, Jamaica. *My Garden* (book). London: Vintage, 2000. Print.
- Nixon, Rob. "Environmentalism and Postcolonialism," Eds. Ania Loomba and Suvir Kaul, *Postcolonial Studies and Beyond*. Duke University Press, 2005, 233-51, Print.
- . *Slow Violence and the Environmentalism of the Poor*. Cambridge: Harvard UP, 2011. Print.
- Prest, John. *The Garden of Eden: The Botanic Garden and the Re-creation of Paradise*. New Haven: Yale UP, 1981. Print.
- Roumain, Jacques. *Masters of the Dew*. Oxford: Heinemann, 1944. Print.
- Saint-Eloi, Rodney. "The Blue Hill." *Danticat*, 302-308. Print.
- Vieux-Chauvet, Marie. *Love, Anger, Madness*. New York: Modern Library, 2009. Print.
- Wynter, Silvia. "Novel and History, Plot and Plantation." *Savacou* 5 (1971): 95-102. Print.
- Young, Robert. *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race*. London: Routledge, 1995. Print.
- 浜忠雄 『カリブからの問い』、岩波書店、2003年。

Received : October, 4, 2017

Accepted : November, 8, 2017